

Ⅲ. 地域体制整備コーディネーターの実施体制

厚生労働省は、地域体制整備コーディネーターの実施体制については、相談支援事業所への配置を想定していますが、実際には、地域移行推進員の配置方法と同様に、都道府県状況によってかなり異なっています。

このため、ここでは、地域体制整備コーディネーターの実施体制として考えられる、①相談支援事業所配置型、②都道府県配置型、③他圏域への派遣型、④都道府県アドバイザー派遣事業との統合型、⑤市町村、地域自立支援協議会への委託型、⑥組み合わせ型について説明しておきます。

① 相談支援事業所配置型

本事業を委託している相談支援事業所に、地域体制整備コーディネーターをあわせて配置する方法です。既に、精神障害者の地域生活移行、地域生活支援についての実績があり、地域自立支援協議会でも一定の役割を担っていることが望まれます。

ただし、相談事業所が主に同一法人の地域生活移行支援を行っている場合などは、第三者としてのコーディネーターの配置を検討する必要もあるでしょう。

② 都道府県配置型

都道府県配置型には2つの方法があります。第1の方法は、既存の職員をコーディネーターとして配置する方法です。精神保健福祉センター、保健所の専門職員がコーディネーターとなります。第2の方法は、都道府県が地域移行推進員について、一括して雇用する事例がありますが、同様に、都道府県がコーディネーターを一括して雇用して配置する方法です。

③ 他圏域への派遣型

本事業を委託している相談支援事業所のコーディネーターを他圏域に派遣する方法です。新たに精神障害者の地域生活の移行支援を始める圏域、あるいは課題の多い圏域には、スーパーバイザー、アドバイザー、アシスタント等の必要とされるコーディネーターの派遣が期待できます。

④ 都道府県アドバイザー派遣事業との統合型

Ⅱの「3. 地域づくりにおける役割 ～地域自立支援協議会を活用しよう～」で説明していますが、地域生活支援事業における都道府県相談支援体制整備事業（アドバイザー派遣事業）に地域体制整備コーディネーター事業を統合して実施する方法です。障害がある人への支援として総合的なコーディネート機能が期待できます。

⑤ 市町村、地域自立支援協議会への委託型

市町村や地域自立支援協議会に本事業の一部や、地域移行推進員（自立支援員）と地域体制整備コーディネーターを委託して実施する方法です。

⑥ 組み合わせ型

①から⑤を組み合わせる実施する方法です。地域体制整備コーディネーターの役割が多岐にわたるために、都道府県と相談支援事業所が役割を分担して実施する方法などがあります。例えば、④の都道府県の地域体制整備コーディネーターが地域体制整備に軸足をおき、医療機関への働きや人材育成のための研修を行い、①の相談支援事業所の地域体制整備コーディネーターが個別支援を行う地域移行推進員のアドバイザーに軸足をおいて協働して実施するなどがあります。

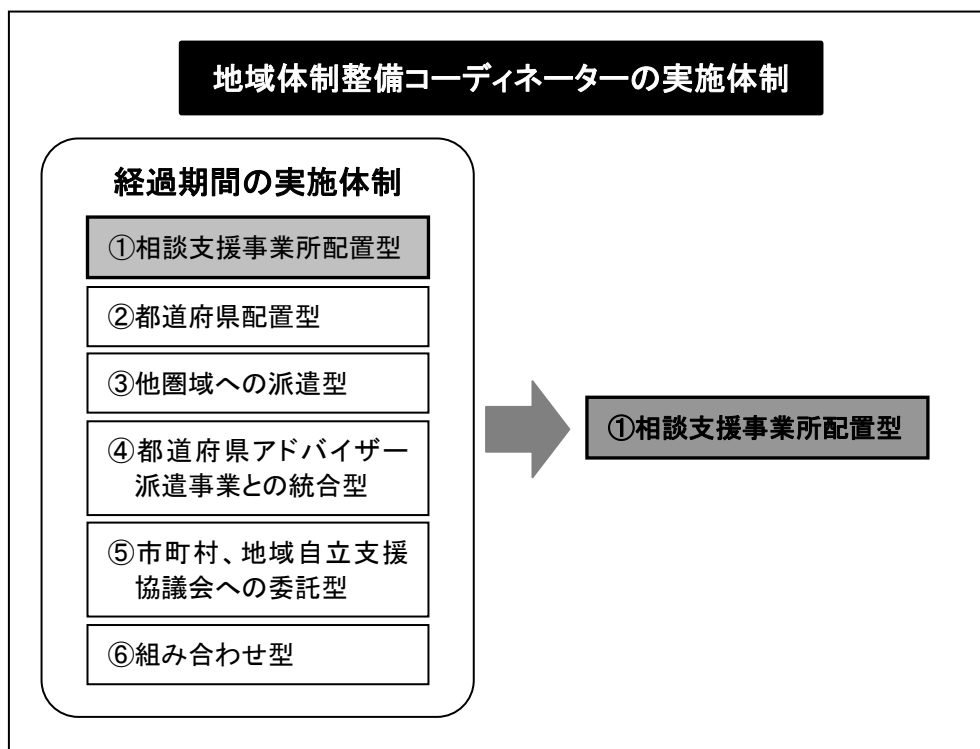


図 22 地域体制整備コーディネーターの実施体制

以上のように、地域体制整備コーディネーターの実施体制について、都道府県は様々な工夫を行っています。しかし、今後は、障害者自立支援法におけるさらなる相談支援の充実等を踏まえて、①相談支援事業所配置型による地域体制整備コーディネーターの実施体制を整備する必要があるでしょう。特別対策事業という観点からも、現状の②～⑥による実施体制は、経過措置として位置づけて、全圏域の底上げを図り、相談支援事業所の機能強化に力を注いでおく必要があるといえます。

地域体制整備コーディネーターは、「病院・施設等への働きかけ、必要な事業・資源の点検・開発に関する助言・指導、複数圏域にまたがる課題の解決に関する助言等といった退院・退所・地域定着に向けた必要な体制整備の総合調整を担当する」等、多岐にわたる役割を期待されています。この事業を通して見えてくる地域の課題を抽出することもとても重要な役割です。

都道府県の事業担当課においては、地域体制整備コーディネーターを通して、地域情報を有効に入手し、自立支援協議会等を活用しながら、都道府県内の支援体制を構築していくことになります。このため、地域体制整備コーディネーターが、都道府県自立支援協議会に委員等として参画することは必須といえます。

地域体制整備コーディネーターの実施体制については、都道府県、各圏域の実情を踏まえながらも、①社会的入院者の権利擁護の視点、②精神障害者の地域生活支援の1つの課題として捉える視点、③地域自立支援協議会と統合する視点、④都道府県の新たな仕組みを構築する視点、⑤都道府県の施策推進の視点をもって整備することが重要といえます。

☆コラム 「私の地域体制整備コーディネーター」

地域体制整備コーディネーターの皆さんは極めて重要な役割を担っています。しかし、都道府県によって期待されている役割が異なっています。もし、地域体制整備コーディネーターの役割がわからなくなってしまう時は、地域体制整備コーディネーターの役割を自分の言葉で書いてみてください。

例えば……。

私の地域体制整備コーディネーター

- 私は、社会的入院をしている人が退院して、自分らしく地域生活を送ることを目指しています。
- 私は、社会的入院を医療機関も含めた地域の課題として捉えて、医療機関と協力して、地域生活への移行を進めます。
- 私は、このような取り組みが可能となるために、地域土壌を整えます。
- 私は、社会的入院を通して抽出された課題を解決していくための手立てを講じ、その解決のための仕組みをつくります。
- 私は、社会的入院をしている人が、退院後、地域でいきいき生活することができるための地域づくりを進めます。

自分の役割を、紙に書いてみると自分の役割が少し整理できます。役割がわかれば、目標を立てられます。目標があれば、「そのためには……」を考えることになって、今やるべきことがはっきりします。何かこのやり方に見覚えはありませんか。おすすめです。

☆コラム 「私たちは笑顔を取り戻しました」

ニーズに寄り添って地域生活へ移行することは重要なことです。しかし、「私は、退院はしません」「特に困っていません」「ずっとここで暮らします」という人もいます。長く入院している人は、自分の夢や希望を封印します。叶う望みがない夢と希望をもつことは苦しいことです。

本事業を通して、夢と希望の封印を解いてもらいましょう。「もう一度食べたいものはありませんか」「行きたいところはどこですか」「やってみたいことは何ですか」……。

ここでは、30年間の入院を体験したお二人のエッセイを紹介します。



「こころのふれあい」 石川千代子

ドアをあけるとさわやかな空気があります。空は澄み切った青空です。散歩にも行きます。買物にも行きます。映画にも行きます。しばられないですむということ、自由だなと思います。

私は、30年入院していました。15年目であきらめました。病院で一生暮らそう

とお友達と約束しました。その人から、「体の病気で私は転院するだろうから、あなたは退院してください」と言われました。

地域移行推進員と当事者の人が病院に来て、住むところや通うところ、生活のことを話していきました。私はその人たちの人柄に触れて、何ともいえない引き込まれる気持ちになったのです。私は退院してみようと決めました。

私は、今、喫茶の仕事をして、働くことの喜びを感じています。あたたかい人たちに囲まれて、うれしくて、たまには涙がポロリと出ることがあります。皆さん、退院して元気になっている私たちをみてください。

入院している人たちへ、「縮こまらないで早く出てきてください」

支援している人たちへ、「入院している人のこころを開いてあげてください」

私は、これからも努力して、今の生活を大切にしたいと思います。



「自分を大切にすること」 梶井茂晴

退院して神経は使うけれど、気分はいいです。今は、就労移行支援事業を利用して、「宮代町ふれあい・センター（老人福祉センター・児童館）」で職場実習をしています。久しぶりに、真剣に取り組んでいるな、なんか人並みに近づいてきているなと我ながら思っています。この先も少しずついろいろなことを重ねていけば自分の力になるだろうと思います。

30年の入院生活は長かったです。早く退院したいと思ってはいたけれど、「今日さえ生きていればいい」とあきらめたり投げやりになったりしたこともありました。今考えると、いつのまにか、自分でもわからないままに30年が経っていました。落ち込んだ時は、病院のスタッフの皆さんによく面倒をみてもらいました。今でも感謝しています。

両親とは「退院したら刺身を食べる」と約束をしていました。そのことを楽しみにしていましたが、両親は私の入院中に亡くなりました。体験宿泊で20年ぶりに刺身を食べて、あと15年食べなくていい気持ちになりました。またいいことがあったら、おなかいっぱい刺身を食べたいと思っています。

地域移行推進員と会ったとき、これはいいと思いました。退院できるかは半信半疑でしたが、退院が近づくかなと思いました。世のなかに出て社会の役に立ちたい気持ちになりました。退院してからは、誰かに言われるのではなくて、自分自身にはっぱをかけなくては駄目だと思いました。自分の思うようにいかないこともあって、大変だと思うけれど、楽しみがあるので苦勞することも大切だと思っています。

退院後、入院している人に会ってきました。なんて活気がないんだと思いました。そこに自分もいたことが、不思議に思いました。でも、自分もできたのだから、みんなも退院できると思います。いっぺんに考えずに、ひとつひとつ小さなことをクリアしていければ、退院できるのです。

地域移行推進員にお願いしたいことは、隠しごとをしないで、退院して暮らしていくための、いろいろな情報を伝えてあげてほしいと思います。きっと、入院している人たちは心を開くと思います。退院しないという人も、本当は不安が大きいのであって、退院したい気持ちをもっていると思います。実は、これは私の体験でもあるのです。私は、60歳になりましたが、いろいろなことに挑戦していきます。30年のブランクをうめたい気持ちでいます。

夢や希望の封印を解きましょう。目標は、退院ではありません。地域でいきいきと生活することです。エッセイを書いた石川さんと梶井さんは笑顔を取り戻しました。このお二人と一緒に入院していた大山さんは、入院中（18年間）、一切大好きな絵を描くことをやめていました。書いても仕方がないと思ったからです。大山さんは、本事業を通して、「もう一度絵を描こう」という希望を胸に抱いて退院しました。再び鉛筆をもった大山さんの言葉です。「大変なこともいっぱいあるけれど生きていると思います」